

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和7年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	佐賀市立 鍋島中学校
-----	------------

1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> 「鍋中学び合い」の学習スタイルが生徒・教師ともに定着し、一定の効果が見られた。今後は、学び合いにおける「人との関わり」や1人1台端末の活用、アウトプットする活動の深化を図る必要がある。 自己指導力の開発のための「承認ボード」や「挨拶」「時間」の取り組みが徐々に広がり、生徒の意識や行動の変容につながってきた。 特別支援教育の充実と不登校の一環として、関係機関との連携や支援体制の強化を図り、生徒の社会性の醸成と学力保障に努める必要がある。
------------------	---

2 学校教育目標	<p align="center">夢と感動にあふれ 豊かな心で 主体的に学ぶ生徒の育成</p> <p align="center">～ enjoy challenge teamwork ～</p>
----------	--

3 本年度の重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 「鍋中学び合い」を取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業実践を行う。生徒の学習意欲を喚起し、確かな学力を定着させる。 生徒が主体的に考え行動する教育活動を行うよう伴奏支援し、褒めて伸ばすづくりを通して、自己肯定感を高める。 特別支援教育の視点を基盤とし、特性や多様なニーズに応じた支援・援助を行い、個性の伸長を図る。 支持的風土の学級・学年づくりを推進し、適切な人間関係を築き、家庭・地域と連携を図り不登校の解消に努める。
------------	---

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

(1)共通評価項目				最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○「鍋中学び合い」のねらいの共通理解を行い、レベル表を提示して深化を図る。 ○授業や家庭学習で学習用端末を活用した課題を設定する。	○全職員が「鍋中学び合い」を実践することで、授業の内容で分かることが増えたと実感する生徒80%以上 ○校内研の教職員アンケートで、学習用端末を活用した課題を設定したと答える教員の割合90%以上	・授業や家庭学習で、学習用端末を活用した学習活動や課題を取り入れる。 ・各授業で、まとめや振り返りを「書く」活動を取り入れ、定期テストに文章記述の問題を2、3問取り入れる。	A	・「鍋中学び合い」を軸とした授業改善が成果を上げている。生徒の98.1%が理解の向上を実感し、思考力や表現力の高まりを自覚している点は高く評価できる。 ・PCを使った課題実施は42%にとどまったが、意見交流での活用は活発化した。今後は校内での事例共有を通じ、個別最適な学びのさらなる充実を目指す。	A	・「鍋中学び合い」を軸とした授業改善が、生徒の理解度向上や思考力・表現力の伸長につながっている点は大きな成果として評価できる。 ・校内での事例共有を進めることで、教員間の実践格差が縮まり、個別最適な学びの充実につながることを期待したい。	・学力向上コーディネーター ・研究主任
●心の教育	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○生徒及び教職員の人権・同和教育の理解を深め、生徒向けの「人との関わり」に関するアンケートで肯定的な回答をした割合が80%以上	・平和集会や人権集会の実施、人権・同和教育に関する職員研修を行う。 ・学級・学年、生徒会、部活動、学校行事などあらゆる場面で人間関係を実践的に学習する場として指導する。	A	・「相手を思いやる言動」の肯定率は約90%と高水準ながら、中間評価より微減した。これは関係性の固定化に伴う遠慮の欠如や、距離感の変化が影響したと分析される。今後は、良好な人間関係を維持・発展させるため、年間を通じたコミュニケーションスキルの育成と、集団づくりに組織的に取り組む必要がある。	A	・「相手を思いやる言動」の肯定率が約90%と高い水準を維持していることは、学校の日頃の指導の成果として評価できる。 ・今後、組織的な集団づくりの取組をさらに充実させることで、生徒が互いを尊重し合い、安心して学べる環境を一層整えてほしい。	・生徒指導主事 ・道徳教育担当 ・人権・同和教育担当
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等)について組織的対応ができていますと回答した教職員90%以上	・毎月、生活アンケートを実施して、いじめの早期発見、早期対応に努める。 ・生徒会の生活委員によるいじめゼロ宣言を行い生徒の意識喚起を行う。	A	・「いじめのない学校づくり」に対し、保護者から91.3%の肯定回答を得ており、本校の取組への信頼が窺える。この評価を真摯に受け止め、今後もいじめの予兆を逃さない早期発見の徹底と、全教職員による組織的な即応体制を継続し、安全・安心な教育環境の維持・向上に努める。	A	・保護者の91.3%が「いじめのない学校づくり」に肯定的な回答を示していることは、学校のこれまでの取組が一定の信頼を得ている証であり、高く評価できる。 ・いじめ防止は、継続的な見守りと組織的な対応が不可欠なので、今後も、全・安心な教育環境の一層の充実を期待したい。	・生徒指導主事 ・教育相談担当 ・生徒会担当
	●生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した生徒90%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした生徒80%以上	・様々な場面で生徒の出番と役割が保証される取組を通して、努力と成長を承認・称賞し、生徒のやりがいと意欲を喚起する。 ・キャリア教育の充実と学びや挑戦することへの価値づけを図る。	・「先生はあなたのよいところを認めてくれると思う」と回答した生徒は91.0%であった。また、「将来の夢や目標を持っている」と肯定的な回答をした生徒は99.4%と大幅に上昇した。これは「出番・役割・承認」のサイクルを意識したキャリア教育が実を結んだ結果であり、今後も生徒の意欲を支える組織的な関わりを継続する。	A	・「先生はあなたのよいところを認めてくれると思う」と回答した生徒は91.0%であった。また、「将来の夢や目標を持っている」と肯定的な回答をした生徒は99.4%と大幅に上昇した。これは「出番・役割・承認」のサイクルを意識したキャリア教育が実を結んだ結果であり、今後も生徒の意欲を支える組織的な関わりを継続する。	A	・学校が意識して取り組んできた「出番・役割・承認」のサイクルが成果として表れている点は非常に意義深い。 ・今後も、生徒一人ひとりの意欲や自己肯定感を支える組織的な関わりを継続し、将来に向けて主体的に歩む力をさらに育んでいくことを期待したい。
●健康・体づくり	●「安全に関する資質・能力の育成」	○生徒の交通事故0(ゼロ)を目指し、事故の未然防止と危険予知能力の向上及び啓発を行う。	・生徒会の交通安全委員会による交通マナー向上に対する取り組みを行う。 ・施設の安全点検を定期的もしくは随時行い、不良箇所については宮積や注意喚起を行う。	B	・交通ルールやマナー(規範意識)については、保護者の92%、生徒の78%が身に付いていると回答しており、ともに前年度を下回った。次年度は、定期的な巡回指導の強化に加え、地域と連携した実効性のある安全教育を推進する。学校・家庭・地域が一体となり、ルール遵守の徹底と交通事故0を目指して指導していきたい。	B	・交通ルールやマナーに関する肯定率が、一定の水準を保っている点は評価できる。一方で、いずれも前年度を下回ったことは課題ともいえる。 ・交通安全は学校だけで完結できるものではなく、家庭・地域との協力が不可欠。三者が一体となってルール遵守の意識を高め、交通事故ゼロを目指す継続的な取組が進むことを望みたい。	・安全教育担当 ・生徒会担当
	●「健康を考えて行動できる能力の育成」	●「健康は何より大切な」保健で学習したことを、自分の生活に活かしている」と答えた児童生徒70%以上	・基本的な生活習慣の確立を図る。 ・自分のからだの異常に気づき、自分の状態を伝えることができる生徒を育てる。 ・けがや病気に対する自己管理能力を身に付けさせる。	A	・「健康は何より大切な」保健で学習したことを、自分の生活で活かしている」と答えた生徒は約90%で、年間を通して目標を達成できた。今後は、自立した健康維持に向け、興味・関心を一層喚起する指導の工夫を重ね、生涯にわたる自己管理能力の育成を継続的に推進する。	A	・年間を通じた健康教育の取組が着実に成果を上げていけると考えられる。 ・生涯にわたる自己管理能力の育成は極めて重要である。今後も、生徒が主体的に健康と向き合い、より良い生活習慣を築いていけるよう、継続的に体系的な指導を実施してほしい。	・養護教諭 ・保健体育科
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	○教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・毎週水曜日を部活動休業日、定時退勤日とし、通常より早めの退勤を心掛ける。 ・ICTを活用した業務改善に取り組む。 ・長期休業中の会議・研修等の持ち方を工夫し、年次休暇を取りやすい状況をつくる。 ・時間単位の年次取得を奨励する。	B	・時間外在校等時間の上限を意識する職員が86.4%(前回比5%増)に達した。今後はこの意識を実効性のあるものとするため、行事や分掌業務の抜本的な見直しを行う。 ・年次取得平均9日の実績を踏まえ、会議の精選やICT活用による効率化を一層推進し、教職員が心身ともに健康に勤務できる環境を構築する。	B	・時間外在校等時間の上限を意識する職員が増加したことは、意識づけが進んでいる証である。一方で、教職員の働き方に関する課題は、学校だけでは解決が難しい構造的な問題が存在することも事実である。行事や分掌の見直しに加え、教育委員会や地域との連携を図りながら、持続可能な勤務環境の整備を進めていく必要がある。	・管理職
●特別支援教育の充実	○生徒支援のための校内体制づくりの充実	○特別支援教育委員会の定期的な開催と校内研修の場の設定	・保護者の理解・同意のもと、「個別的教育支援計画」と「個別の指導計画」を作成し、全職員で情報共有を行い、生徒一人一人の支援にあたる。 ・特別支援教育委員会を定期的に開催し、確実に情報共有の場を設定する。	A	・「個別的教育支援計画」と「個別の指導計画」を基に、今年度の総括と次年度への引継ぎを実施した。保護者面談で情報共有を密にすることで、学校と家庭が一体となった個に応じた支援を実現している。 ・特別支援教育委員会やケース会議を核とした組織的な情報共有と研修を重ね、支援の質の向上と円滑な教育活動を推進した。	A	・継続的で一貫した支援体制が整っている点は、高く評価できる。また、学校と家庭が一体となった個に応じた支援を実現している点も大きな成果である。 ・今後も、関係機関との連携を深めながら、生徒一人ひとりのニーズに応じた支援がより円滑に行われる体制づくりを継続してほしい。	・特別支援コーディネーター
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○不登校対策	○不登校生徒数を減らすための取組の推進 ○不登校生徒が増えない取組の推進	○昨年度の不登校生徒の割合(658名中37名…5.6%)から減少 ○「鍋島中学校に入学してよかった」と回答する生徒80%以上	・教育相談委員会等を利用し、生徒情報の収集・共有、対策を図り、全職員で対応に当たる。 ・専門機関等との密な連携や小中連携を図り、助言や面談を随時実施する。 ・いじめアンケート結果を利用し、問題の早期発見、早期対応に努める。	B	・「鍋島中学校に入学してよかった」と回答した生徒が90%を超えた一方、不登校生徒数は前年度より増加した。個々の背景による登校困難事案が増え、家庭との接点確保に注力したものの、一部で連携に苦慮する現状がある。今後は関係機関との連携を一層深め、アウトリーチを含めた多角的な支援体制の構築を急ぎたい。	B	・アンケート結果は、日頃の教育活動が生徒に届いている証と言える。一方で、不登校生徒が増加しており、学校だけでは対応が難しい複雑な背景を抱えるケースが増えていることが窺える。 ・学校・家庭・地域・専門機関等が協働し、生徒一人ひとりに寄り添った支援がより確実に届く環境づくりが進むことを期待したい。	・教育相談担当 ・各学年教育相談担当

5 総合評価・ 次年度への展望	<p>●…県共通 ○…学校独自 ◎…志と誇りを高める教育</p> <ul style="list-style-type: none"> 前年度に比べて、生徒の規範意識が低下したことが課題である。次年度は巡回指導の定例化と地域連携を強化し、生徒が自分事としてルールを遵守する意識の再構築を図る。 教職員の働き方改革に関し、意識向上と年次取得に成果は見られたが、業務総量の削減には至っていない。今後は行事や会議のスクラップ・アンド・ビルドを実行し、組織的な負担軽減に取り組む。 学校に対する満足度は高いが、不登校生徒の増加と家庭連携の困難さが課題である。次年度は関係機関との連携をさらに深め、組織的な早期対応と多様な居場所づくりを一層推進する。
--------------------	---